

## 第1回 大関和とは ー時代背景と人物紹介ー

本市出身の<sup>おおげきちか</sup>大関和をモチーフにしたNHK連続テレビ小説「風、薫る」が、令和8年(2026)春から放送予定となっています。それに先駆け本紙では、和の人物像や事績、ゆかりの地などを、隔月で全6回に分けて紹介していきます。

後にわが国看護界の先駆者となる大関和(1858-1932)は、安政5年(1858)4月11日、黒羽藩の重臣<sup>とくだか</sup>で石高200石の大関<sup>だんえもんますとら</sup>弾右衛門増虎・テツ夫妻の次女として、黒羽田町に生まれました。当時の黒羽藩では、文久元年(1861)に15代藩主に就任した大関増裕の指導により、軍制改革を中核とした藩政改革が推進されていました。そうした中で父増虎は、元治元年(1864)2月7日、家老に就任しています。増虎は、硫黄の採掘の陣頭指揮にあたるなど、鉱山業務を中心として活躍しましたが、慶応3年(1867)12月9日の増裕の急死後、同4年8月に辞職しました。それでも増虎は、明治2年(1869)3月の黒羽藩の藩制改革<sup>いえちじ</sup>によって家知事となり、同3年7月には白川<sup>たいそく</sup>県大属に任命されて、当地の勸業に寄与するところとなりました。

明治9年5月27日、増虎は50歳で死去しますが、この年、和は渡辺<sup>わたなべとよつな</sup>豊綱(1838-1925)と結婚しています。渡辺家は石高200石の家柄で、豊綱は物頭・砲術教示方という役職にあり、後には陸軍少尉となっています。和は明治10年に長男六郎を、同13年に長女シンを産んでいますが、豊綱とは離婚となりました。

和は明治14年に上京、同20年1月、桜井女学校附属看護婦養成所に入学し、その第一期生の一人となりました。翌年10月に看護婦養成所を卒業した和は、帝国大学医科大学附属第一医院(現東京大学医学部附属病院)の外科の看病婦取締となったことを皮切りに、新潟県の高田女学校に舎監として赴任したり、東京看護婦会講習所講師となったりしています。その後も、自身の著書『派出看護婦心得』や『実地看護法』が刊行となり、明治34年には東京看護婦会会頭に就任しています。さらに、明治42年11月には大関看護婦会を設立し、大関看護婦講習所を開所して、後進の育成と派出業務を通じた実践活動に専念しており、同44年には大日本看護婦協会東京組合長に就任となり、現在では「明治のナイチンゲール」と呼ばれています。



桜井女学校時代の和の大関  
前列右から2番目(知命堂病院提供)

## 第2回 大関和、殿さまの謎の死を語る



本市(黒羽田町)出身で「明治のナイチンゲール」とも呼ばれる看護会の偉人・大関和の足跡や事績を紹介する本コーナー。今回は、和が語った大関増裕おおせきますひろの死についてご紹介します。

第1回(5月)でも少しご紹介しましたが、和が幼い頃の黒羽藩主は、藩政改革を推進し、若年寄わかどしよりや海軍奉行かいぐんぶぎょうといった幕府の要職も務めた大関増裕でした。

慶応3年(1867)12月9日、王政復古の大号令によって幕府が廃止され、新政府が誕生しました。日本史の転換点ともいえるこの日、黒羽では増裕が急死しました。金丸八幡宮(現在の那須神社)周辺で狩りをしていたところ、銃弾が顔面を貫通し亡くなったといえます。この時、増裕は30歳、和は9歳でした。

この事件については他殺説・自殺説・暴発説がありますが、和と母・哲てつは大正5年(1916)に「父から聞いたが、自殺だった」と証言しました。その内容は、大正7年(1918)に刊行された『黒羽藩戊辰戦史資料並附録』に収録されています。証言の信憑性については詳細な検討が必要となりますが、増裕は亡くなる前夜、家老の大関弾右衛門増虎おおせきだんえもんますとら(和の父親)を呼び出し、人払いをしてから次のように伝えたといえます。

「我が黒羽藩は、率先して天皇をお守りしたい。しかし、気がかりなのが会津藩だ。会津藩は朝敵となり、黒羽藩は会津討伐軍に加えられるだろう。天皇には忠義を尽くしたいが、私(増裕)は幕府の要職にあるし、兄弟と思う会津藩を攻撃するのは忍びない。そこで『臣節』(臣下として守るべき節操)を全うするため、私一人が犠牲となる。黒羽藩は、天皇に尽くして欲しい。増虎は殉死などせず、私の志を全うして欲しい。」

増裕の死後、黒羽藩は新政府軍に属して白河や二本松、会津若松などを転戦し、「臣節」を全うしました。



## 第3回 企画展「明治のナイチンゲール大関和のふるさと黒羽と医療」開催

本市出身の大関和(1858-1932)をモチーフにした NHK 連続テレビ小説「風、薫る」が令和 8 年(2026)春から放送されるのに先立ち、黒羽芭蕉の館では、企画展「明治のナイチンゲール大関和のふるさと黒羽と医療」を開催します。会期は、令和 7 年 10 月 8 日(※)～令和 8 年 3 月 1 日(◎)を予定しています。

企画展は、**1**大関和の生涯と功績、**2**大関和のふるさと黒羽の景観と文化、**3**大関和が子供の頃の黒羽、**4**江戸時代後期黒羽の医療という 4 つのコーナーで構成し、約 80 点の資料を展示する予定です。

**1**では、大関和の略年表や生涯・功績を示すパネル、和の肖像写真などを展示する予定です。

**2**の前半では、江戸時代後期に黒羽藩の絵師 小泉斐こいずみあやるが描いた「黒羽周辺景観図」をはじめとした真景図の数々や黒羽城郭内の絵図、「船橋を隔て黒羽田町の図」、「黒羽河岸近傍見取図」(パネル)、大関和生誕地のあたりの写真パネルなどを展示予定です。後半では、江戸時代の黒羽文化を象徴する黒羽藩 11 代藩主大関増業おおげきまさなり(1782-1845)に関する諸資料を紹介し、増業が教育振興のため、文化 10 年(1813)5 月に「素読所」の設置を命じたことを示す記録や、『創垂可継』(全 71 巻)・『止戈枢要』(全 353 巻)・『乗化亭奇方』(全 70 巻)といった増業の主要編著書を展示予定です。

**3**では、和が子供の頃の黒羽藩 15 代藩主 大関増裕まさひろに関わる資料の数々、具体的には官位への叙任を示す文書や天狗党への対応を示す文書、増裕が撮影した写真、増裕の指導により増強された黒羽藩の軍勢力を示す記録などを展示する予定です。

**4**では、小泉斐が中国の医薬神「神農」を描いた絵画作品や、幕末維新期の黒羽(大関家や黒羽藩校)に存在していた西洋医学書の数々、江戸時代後期黒羽の医師に関する資料などを展示する予定となっています。

展示をご覧いただき、日本看護界の先駆者大関和が生まれ育った黒羽の景観や文化的風土、江戸時代後期～幕末維新期の黒羽および医療の一端についてご理解いただければ幸いです。



小泉斐筆「神農図」  
(黒羽芭蕉の館蔵)

## 第4回 医療の発展に尽力した人々

本市出身の大関和(1858-1932)は、正規の訓練を受けた看護師(トレインドナース)として多くの功績を残した「日本の看護師の先駆者」といえます。現在、黒羽芭蕉の館では、企画展「明治のナイチンゲール大関和のふるさと黒羽と医療」を開催しており、和が生まれ育った黒羽の景観や文化的風土と共に、幕末維新期の黒羽の医療の一端についても紹介しています。今回は、同展示では取り上げられていない本市出身で医療の発展に尽力した人物を紹介したいと思います。

まずは江戸時代の儒学者・もろくずきんだい 諸葛琴台(1748-1810)です。琴台は寛延元年(1748)に下蛭田村(現蛭田)に生まれました。幼いころより学問に励み、儒学者として多くの著書を残した琴台ですが、下野国内で初めての解剖に携わったことでも知られています。琴台の監督による解剖は、寛政年間(1789-1801)に日光で行われ、その様子は『かいししんべん 解屍新編』としてまとめられました。

次に、しゅとつ 種痘の普及に尽力した北城諒斎(1822-91)です。てんねんとう 種痘とは天然痘という感染症をワクチン接種によって予防する方法です。このおかげで天然痘は、現在人類が地球上から撲滅できた唯一の感染症となりました。天然痘ワクチンは、寛政8年(1796)にイギリスの医師エドワード・ジェンナーによって開発され、日本では嘉永2年(1849)に国内で種痘が成功し、各地で実施されるようになりました。大田原では嘉永4年(1851)、諒斎によって実施されたのが初めとなります。

諒斎は文政5年(1822)、大田原藩医を務める家に生まれ、24歳の時に江戸に行き西洋医学を学びます。帰郷後は父の跡を継ぎ大田原藩の侍医となりますが、嘉永2年に再び江戸に行き、種痘について学びました。当時はまだ西洋医学の知識も浸透しておらず、病気もまじないで治ると信じる人もいた時代で、ワクチン接種に抵抗を示す人も多かったようです。そのような中であって諒斎は、那須地方で種痘に尽力し、多くの人を救いました。



小泉斐画・諸葛琴台賛  
「男体山・中禅寺湖・華嚴滝図」  
(黒羽芭蕉の館蔵)

## 第5回 大関和の生誕地

本市出身の大関和(1858-1932)は、日本で最初期のトレインドナース(正規の訓練を受けた看護師)の1人で、看護界に多大な貢献をしたことから「明治のナイチンゲール」とも呼ばれています。

大関和は、故郷の黒羽でどのように過ごしていたのでしょうか？残念ながら資料が無いため、詳しいことは分かっていません。しかし、父親の大関<sup>だんくわん</sup>弾右衛門<sup>もんすけ</sup>増虎<sup>とら</sup>の屋敷があった場所は分かっています。

大関家伝来の資料や現在黒羽芭蕉の館で展示している屋敷の配置図によると、増虎の屋敷は大雄寺から数えて南側9軒目、大宿<sup>だいじゆく</sup>街道<sup>かいどう</sup>沿いにありました。和も、ここで生まれ育ったと考えられています。大宿街道は、黒羽城の南側の外郭にあたる場所で、黒羽藩士の屋敷が並んでいました。この場所には、現在は黒羽小学校のプールがあります。ちなみに、プールの西側は眺めが良く、那珂川や高原山、那須岳(茶臼岳)を望むことができます。もしかすると、和も同じ場所から景色を眺めていたのかもしれませんが。

皆さまも、現地で和と同じように眺めてみてください。



和の生誕地と大宿街道

### 【イベント情報】『明治のナイチンゲール 大関和物語』著者・田中ひかるさん講演会

2026年度前期連続テレビ小説「風、薫る」(NHK)の原案の著者・田中ひかるさんをお招きし、講演会を開催します。

- 日時 1月31日(土) 13:30～15:30
- 場所 那須野が原ハーモニーホール 大ホール
- 申込 不要

問文化振興課 本4階

TEL 0287-23-3135

詳細は、市HPを  
ご覧ください。



## 第6回 大関和の功績

大関和は、日本で最も早い時期に正規の訓練を受けた看護師「トレインドナース」の1人として、正しい知識と技術をもって多くの傷病人に寄り添い、献身的な看護を行いました。今回は和が生涯をとおして取り組んだ働きについて紹介します。

まずは、看護技術の向上や後輩看護師の育成です。新潟県高田(現、新潟県上越市)の知命堂病院では、看護師として働くだけでなく産婆看護婦養成所で講師を務めました。東京に戻ってからも、東京看護婦会講習所の講師に就任し、明治42年(1909)には自身で大関看護婦講習所も開講しました。正しい知識と技術、加えて自身の経験を伝え、後輩を育成したのです。

次に、感染症対策と公衆衛生の普及です。当時、たびたび流行したコレラや赤痢などの感染症は、多くの人々の命を奪う恐ろしい病気でした。和は看護学校で学んだナイチンゲール方式にもとづき、排泄物の正しい処理、丁寧な清掃と換気、患者の身体や衣服を清潔にすることを徹底し、大きな効果をあげました。女子学院(前身のひとつが桜井女学校)が昭和3年(1928)に出版した『女子学院五十年史及学窓回想録』掲載の手記の中でも、群馬県や埼玉県でそれぞれ100人程の赤痢患者を看護し、死者を5~6人に抑えたと振り返っています。

最後に、看護師の仕事やその存在の重要性の普及活動に尽力したことです。明治32年(1899)に『派出看護婦心得』を、同41年(1908)に『実地看護法』を刊行するなど、著書の刊行や雑誌への寄稿を通して、看護の重要性や意義、実践方法、看護師としての心得について普及啓発を図りました。

以上のように、和は日本の近代看護の先駆者として多くの功績を残しました。そんな和の生涯や活躍について、時代背景や彼女を取り巻く人物と共に紹介する展示会「近代看護の先駆者・明治のナイチンゲール 大関和」が、3月14日④から那須与一伝承館で開催されます。ぜひご来場ください。

晩年の大関和 (知命堂病院提供) ▶

